

契丹文字の新資料

(圖版第一一・一三圖 参照)

古來支那の北方に據つた民族の間には、その文字の基礎を西方諸國に行はれた音字に取つたものと、南方支那に行はれた義字に取つたものとの兩様がある。何れにしても此等の民族の用ゐたものとは、語系や音韻を異にした言語の表出に適するやうに案出されたものを攝取したのであるから、其の間に無理があり、従つて當時之を用ゐた人々にとつては不便、後の攷究者にとつては疑惑の點の存することは止むを得ない。中にも西方の音字を用ゐたものについては、その表出した音を求むること甚しく困難では無く(微細な點は別として)従つて其の書寫された言語を研究解釋する第一の階梯に於て、甚しき困難を感じないのであるが、漢字を變化して用ゐたものについては、第一に其の音を知ることが困難であるから、研究の出發點に於て既に大なる難關に遭遇する譯である。それにして、もその資料が豊富であれば、どの方面からか切込んで研究を進めること必ずしも不可能ではない。今より五十餘年前に、博學なる Wylie 氏を以てしても尙どこの國に行はれた文字であつたかすらも知り得なかつた西夏文字や、金に行はれた所謂女眞文字などが、輓近やゝ解明せらるゝことになつた如きはそれである。たゞ獨り契丹の文字に至つては、其の資料すら從來殆んど存在せず、たしかなものとしては僅に宋の王易の燕北錄^①に、朕・勅・走・馬・急等に對する契丹字を載せ、陶宗儀の書史會要に之を轉載したと思はるゝものが見えるのみであつた。此等の次第